

花街を生きた女性

西本 穂佳

(山崎 美紗子ゼミ)

はじめに

現代では「花街」と聞けば、京都の観光地の一つとして有名な祇園などから歴史ある景観や、その中を歩く舞妓・芸妓がお酒や料理が出されるお座敷において芸で興を添える姿がイメージされる。しかしその一方で、花街と聞くと「遊郭」をイメージする人も見られ、こちらは売買春が公に認められていた場所である。こうした現代からみた花街のイメージの違いは何故生まれたのか、どのようにして現代のような花街の形になったのかを、成り立ちや各地の花街の違いから探っていく。また、現代では気軽に体験できるようになったお座敷遊びや、京都の観光地でよく見られる舞妓体験などを通じて花街文化に興味を持つひとも多いが、昔の花街を生きた女性たちは一般の人からみてどのような存在だったのか、史料などから明らかにしていきたい。

第1章 花街について

1-1 花街の成り立ち

「花街」とは色街・遊廓ともいわれ、大きく一つの言葉に表していても地域や時代によって違いはあるが「身を売る娼妓と芸を売る芸妓」両方が存在していた街である。

地域ごとの違いをなしに大まかに言えば、「芸妓」の所在する場所のことをいう。しかし、ただ芸妓がいれば営業できるわけではなく、芸妓を抱える置屋という場所から、その芸妓が芸を披露して宴を行う料理屋、

旅館などが必要である。つまり、芸妓を抱える置屋と芸妓の派遣先となる場がある程度集積して、初めて花街と呼ばれるようになる。逆に料理屋や旅館が集積していても、そこで芸妓の営業を認めていなければ、花街とは呼べない。このことから、芸妓が少なく娼妓を主に営業する遊郭や、その逆で芸妓を主にしているが少数でも娼妓がいた花街は、どちらも広義の花街に含まれることになる。

花街と遊廓が明確に分けられるようになったのは、明治期になってからである。この頃になると遊廓の「貸座敷」(娼妓が集まり座敷を借りることを建前とする場所)を一定の区画に囲い込んだ土地が、風俗警察による取り締まりの対象となり、明治33年には「娼妓取締規則」をもつて売買春が一定の空間の内部で認められると同時にそれを各地方の警察が取り締まるという枠組みが成立した。

娼妓による売春の空間的な囲い込みが実施されたことにより、芸をもつて宴席に興を添える芸妓との分離が推し進められた。借座席の営業をする土地区画を指定することで、「娼妓」を本位とする遊廓、そして「芸妓」を本位とする狭義の花街が成立した。

1-2 二つの花街

時代によって違いが多くある花街だが、地域ごとによる違いはあるのか。本章では全国各地にある花街から東と西を代表して東京と京都に絞って比較していく。

まず現在も残っている花街についてだが、東京では芳町、新橋、赤坂、神楽坂、浅草、向島、八王子、円山町、大井・大森、京都では祇園東、祇園甲部、上七軒、宮川町、先斗町の五つの花街が残っている。ど

これらの地域も舞妓は人数増加の傾向がみられるが、芸妓に関しては減少しつつある。というのも、舞妓は芸子になるまでの修行期間のことで着物などの装飾品から、住むところまですべてを置屋のお母さんが面倒をみてくれるが、芸妓になってからはそれらをすべて自分でみて自立しなくてはならない。豪華な衣装などを自前で用意するのは金銭的にも難しく、舞妓のみで引退してしまうのが現実である。ちなみに享和二年（一八〇二）に滝沢馬琴が『羈旅漫録』において記された京都の花街は四十五カ所の地名が挙げられている。これを参考に、明田鉄男は『日本花街史』^①において

『蜘蛛の糸巻』では三十三カ所、『寛天見聞記』でも三十三カ所、『かくれさと雑考』『江戸の岡場所』は百六十二箇所としながらも、地名を挙げているのは五十八カ所である。これは数え方にもよるわけで、一地区をさらに細分すれば数倍の数字になるのである。結局江戸の隠売女地区は最大五十八と見てよいであろう。当時の江戸人口を百万として一万七千人につき一遊所、一方京都は推定人口三十万だから、四十五カ所を割ると六千六百人につき一遊所

と京都と江戸の遊所の数を比較しており、結果として京都のほうが遊所は多かったとしている。

東京と京都の花街を比較してまず目についたのは、名称の違いである。先ほど説明した「舞妓」「芸妓」というのは東京では「半玉」「芸者」と呼ばれる。また、江戸時代では京阪の「傾城」江戸の「女郎」と呼ばれていた。

次に遊興費の違いについてである。これは廓ごとにも違いがあり優れた遊女が多い島原は高く、下級の遊女を揃えているところは安い。江戸初期の日本硬貨は、金・銀・銅が確立しており、金銀の間の交換率は公式に金一両が銀六十匁と定められていたが、これは時代によって流通の相場が変動していた。また、地域によっても異なりだいたい関東は金本位、関西は銀本位とされており、これは関東に銀座地が多くあったことと戦国の有力武将が軍資金として多く金を貯え、その武将の末である将

軍家が金の方に親近感を持っていたこと、さらに関西に多かった大商人が銀本位の国である中国と貿易をする必要上、銀資本を保有していたことなどが理由とされる。しかし、関東関西ともに身分・職種によって金本位であるか銀本位であるかの使い分けが行われていたことがある。例えば、幕府の給与する手当・賞与の類で大名やお目見以上の旗本は金、お目見以下は銀、百姓町人には銭（銅貨）が与えられた。これが江戸町人にも伝わり、職人の工賃は銀、日雇い稼ぎの日当は銭、商品の値段も薬類や砂糖は銀、農産物は銭だった。遊興代は、下級娼妓のいる小店は銭店といい銅貨制、上級の店は銀店といって銀貨制、その中間は両方を扱うので銀銭店と称していた。京都では記録が残っている十カ所の場所をみてみると、銀貨制が六カ所、銅貨制が四カ所、金貨制は高級遊女のみに使われている。

第2章 遊女の歴史

2-1 遊女の起源

遊女の起源については、いくつかの説があり明確には分かっていない。民俗学者の柳田国男は「遊女は本来巫女であった」とする「巫娼」説を主張し、それに反対した法学者の滝川政次郎は「遊女の元祖は半島から渡来した朝鮮の漂泊民白丁族である」説を主張している。では遊女というのが明確に登場するようになったのはいつからなのか。様々な名称で呼ばれ歴史書や和歌文学において多く登場する中で史上最初に遊女が出てくるのは日本最古の和歌集万葉集である。天平二年（730）の二月、大宰帥大伴旅人が筑紫から京へ帰るときに水城の郷で出会った兒島という遊行女婦（さぶるこ）が別れを惜しんで贈った歌である。以下、『万葉集』巻六より、

965 凡ならば、かもかくもせむを畏みと、振りたき袖を忍びたるかも
という遊行女婦が詠んだ歌に対し、

967 大和路の吉備の兒島を過ぎて行かば、筑紫の兒島思ほえむかも
と旅人が返歌している。

遊行女婦とは、宴席に招かれて歌舞を披露する女性のとこで、遊行には住所不定の意味がある。また、この他にも万葉集にはいくつかの遊女が詠んだ和歌が残っているが、女流歌人として収められており、遊行女婦のことをウカレメ、アソビ、ヤホチなどと説明されていることもあるが、実質的には全て遊女であったと考えられる。

花街の歴史を大きく分けるならば散娼時代と遊郭時代に分けるのが一番分かりやすいが、もう少し細かく時代区分をしたい。そのため、先程「遊女の元祖は半島から渡来した朝鮮の漂泊民白丁族である」と主張した滝川政次郎が八つの時代に区分してまとめているので、本稿でもその時代区分に合わせて遊女の歴史について探っていく。

(一) 帰化人優待時代

文献で初めて遊女というものが現れるのは奈良時代であるが、沈黙売買や物々交換が行われていた時代に財物をもって女の貞操を買うという行為が行われたとは考えられず、この時代に遊女が出現した事を滝川氏は否定している。もちろん、宴席に興を添える侍女に値するようなものも存在していただろうが、遊女というのは不特定多数人の招きに応じて、その宴席に興を添え進んでその枕席にも侍してその報酬によって生計を営む者であり、この時代にそれを行う遊女はいなかったと考えられる。また、滝川氏は奈良時代の遊女の前身は、職業としての遊女の社会が成り立っていた漢や朝鮮における朝鮮人および半島に住む漢人から渡来したものと主張しているので、これらの人々が渡来した応神・仁徳時代以前に遊女の歴史は誕生しないことになる。

(二) 遊行女婦時代

大化の改新より平安奠都に至る期間に至る。先述した万葉集に遊行女婦という名称で遊女が出てきた頃で、遊女の生息やその分布がよく書かれるようになり日本の遊女史もこの時代から書き始められる。

(三) 遊女傀儡子時代

平安初期から院政時代あたりの期間に至る。この時代の末には「遊女記」、「傀儡子記」なる二つの文献が出されるようになる。また、この時代には宇多天皇が鳥飼の院に江口の遊女を招いたり、後三条院が住吉詣の途中で御幸の船に寄り集まってきた遊女に纏頭を与えるようになり、

かつては貴紳の宴席に呼ばれるだけであった遊女が、その芸能を認められ社会的地位を上昇させていたことが分かる。

(四) 白拍子宿々の遊君時代

鎌倉開府以後、南北朝初期に至る。平安初期にあらわれた白拍子という舞女が、鎌倉時代には「白拍子なる男装の麗人」と称されて貴紳の宴席枕席に侍するようになる。そして鎌倉に幕府が開かれ海道筋にある宿屋が栄えたのをきっかけに、多くの宿屋へと転出していき宿々の遊君となっていく。この時代では、源頼朝によって「遊君別当」という遊女を統制するものがおかれ、これは後に遊女を取り締まる公娼制度において初めての取り締まりであった。

(五) 傾城巫娼時代

南北朝の末期から室町の終わりまでに至る。この時代は土一揆などの大乱により、社会の秩序が破壊、寺社権門も没落し、寺社に奉仕していた尼僧や巫女は給与を失い「歩き巫女」、「県巫女」、「イタカ」等の巫娼となり、宿々の遊君たちも「キミ」、「傾城」と呼ばれるようになる。

(六) 遊郭全盛期時代

豊臣秀吉が京都に公認の遊郭を設置してから、徳川中期の享保元文の頃に至る。室町時代には京都に朝廷と幕府があったことから、京都と町の中に娼家ができていた。しかしこの娼家は正平二年に火事によって焼け野原となる。そこに天正十七年(1589年)、原三郎左衛門が豊臣秀吉の許可を得て、西洞院にあった遊女町を柳ノ馬場に移して遊里を開く。この場所は後に発展していくこととなり慶長七年には元の西洞院に引き戻されている。秋里籬島の『都名所図会』には

慶長七年に六条にうつまれ、今の室町新町、西洞院の南にて、方丈町の廓なり。中に小路三通ありしにより、三筋町と号す。六条通西洞院川にかくる石橋は、傾城町の入口にして、此時かけ初めしなり。今にあり、又室町五条の南西醜屋の居宅異風なり。此時の忘八にして、今に存せり

とあり西洞院というのは、六条三筋町のことである。ちなみに、この六

花街を生きた女性

条三筋町の遊里は後の島原となる。この柳ノ馬場の傾城屋が、洛中の傾城営業を独占する権利があったかは定かではないが、娼家が一廓に集中し遊女がそこに住んで売色を行うようになり、遊廓が初めて設置されたということはこの時代において大きな出来事であった。

またこの時代では、室町時代に渡来した南蛮人によってもたらされた性病が遊里に拡がり、多くの遊女たちがその保菌者となった。この性病に関しては、明治以後までなんの対策がとられることはなく、江戸時代においてこの病気によって亡くなった遊女たちは多くいた。

(七) 遊郭衰微時代

享保から幕末維新までに至る。この時代は、遊郭より岡場所という政府の許可を得て営業していた吉原以外の非公認の娼家が集まった遊郭が栄えていた。しかし、吉原は政府から許可を得て正式に営業しているという特権をいい事に理不尽な金を客から徴収したり、格式高いことを誇りに思っていることから面白くだけた遊びをしなかったため、町人からは見放されていき、日に日に衰微していった。一方で岡場所は町芸者が誕生するなどしてどんどんと繁栄していき、吉原の人気を遥かに超えることとなる。寛文年中、これに嫉妬した吉原の請願により、政府から私娼（隠売女ともいう、吉原以外の場所でする売春行為をする女のこと）の禁令を出し、更に寛文十年七月には江戸の町において私娼を抱え置く者に対して厳重な掟を定めた。この問題は江戸だけでなく、京都でも同じように起きており、公許の遊郭である島原は寂れていき、岡場所が繁栄、祇園では美容と芸能をもつ芸妓が京洛の花として人気となった。しかしこの京都の岡場所も、江戸に同じく取り締まりを受けることとなった。この時、宮川筋・二条新地・内野新地・北野七軒・五条橋下・七条新地その他の岡場所から計千四百七十七人の芸妓売女を捕えた。この女達は島原に預けられていたが、人の多さから島原だけでは抱えきれず、祇園町・祇園新地・二条新地・七条新地・北野新地の年寄に、五か年のみ、各新地に売女株二十軒を差し許し、一軒に十五人抱え置くことを免許するかわりに、傾城町へ遣わされることになった女たちを、島原の傾城城と相対の上、賃借料を支払って借り受けて営業するように命令した。

この時代では、江戸の新橋において船宿で酒を楽しむ客の相手をする

新橋の芸者が新しく現れる。芸者は踊子や町芸者が起源とされており、芸達者な素人娘も加わっていたことから新鮮みがあり、人気を博していた。この時代では、芸者は身を売らず、新吉原においては花魁の取り巻きであった芸者のほうが人気が高く、寛政七年に新吉原の傾城屋たちが作った新吉原町定書には、芸者の売色を予防するために、芸者は必ず二人一組で相手の売色を監視する制を定めていた。しかし新橋の芸者においては、このような監視はなく、自由に朗らかであったため、時代の脚光を浴び花柳界においてトップへと登りつめた。

(八) 芸娼妓時代

明治元年より昭和三十四年の売春禁止法施行に至るまでの時代にあたる。明治五年、外国から日本の遊女における奴隷売買において疑問の声が上がり、同年十月に娼妓解放令において人身売買を禁止する大号令を出す。しかし、何百年と続いた遊郭の制度においてこの一つの法令で簡単に取り締まれるものではない。

『京都先斗町遊廓記録』によると、

十二月二日附を以て芸娼妓解放令を布れて、人身売買の悪弊を禁止し独立自由の様を与へられ又も大恐慌を来したり。芸娼妓にして情夫を有するもの惑ひは苛酷なる抱主をして呵責を受くるものは籠の鳥を放ち空を馳る幸運時に遭遇したるに、幸ひなるかな。全国相通じて実行せしもの甚だ稀なり。偶々恩露に浴して親許へ帰るも、其親大率困窮者なれば、口数殖えて徒づらに餓死する他なければ、開を口実の下に歎訴せしに、大參事横村氏は府政革新の要路に当たり釐正する所大方ならざりしも、氏は花柳の大通妊娠とて、酸も甘も嘔みわけ、能く其の哀訴を入れて、之れが名称を改め月税を賦課することとなり、貸座敷三両、娼妓二両、芸妓一両とす

とあり、娼妓解放令が出されたあと困窮の実家へ帰り邪魔者扱いされる女や長年の廓づとめにより男なしでは生きていけないようになった女が多く、「自分の意志で」廓に帰る女たちが続出していき、横村正直参事によって本人たちが希望するのなら芸者娼妓を続けても良いということ

となり、貸座敷渡世規則によって、貸座敷・娼妓・芸妓の営業が合法化された。

2-1-2 遊女と芸妓

ここまで、花街を生きた女性たちの起源をふりかえってきたが、遊女から派生した芸妓（京都では芸妓、東京では芸者という）と遊女の違いについて述べていきたい。遊女というのは、時代や場所によりいくつもの名称があり、うかれめ・あそびめ・湯女・桂女・茶屋女など実に様々である。こう見ると、芸妓も遊女の名称の一つであるとされそうなるのだがこれは全くの別物で、遊女は「身を売る」が芸妓は「身を売らない」、名の漢字通り「芸を売る」女性のことを言う。

遊女に関しては前章で述べたが、ここではもう少し詳しく遊女の実態について明らかにしていく。遊女にはその格によって等級があり、天正十七年（1589年）豊臣秀吉が京都に公認の遊郭を設置した頃は太夫と端女郎の二階層であった。太夫は、京都からうまれたもので芸の上の名称のことをさす。江戸時代になると二つだった職階が、京都島原では上から「太夫」、「天神」、「囲」、「端女郎」の順に職階が設けられるようになる。このようなランク制が設けられた理由を明田鉄男は「日本花街史⁽⁴⁾」において

こうしたランク制を設けた理由は、①遊女は商品であるから、ないよう充実しておければ需要多く、従って代価高く、内容貧弱なら安値となる。はじめから内容と代価を明示する方が売買ともに便利である。②上位昇進をめざして遊女同士が競争心を持ち、「仕事」に精励格闘する、の二項目に尽きると思う。

と述べている。太夫というのは、様々な優れた教養を持つものでありいずれも美人だからなれるというわけではなかった。また、多くの権勢ももち、品位を保持しながら教養において向上心を持ち、自らの責任も重大であった。

抑も能女郎といふものは琴三曲も暗からず、三線の手よくまはすれども、弾かぬ振しておほどかにもてなし、古歌の二三千首も暗に覚え、清女紫婦（清少納言、紫式部）の文句を味ひ、仮名遣ひに心をつけ墨つき美はしく見するなど、あながち文にて人をなづませんとはあらねば、色道の礎なれば、心たしなむべき第一なり。よろづに体をつくるといふにはあらねば、自然と氣勢もてしづめて臈たげに見ゆる工夫あるべし（『風流敗毒散』⁽⁵⁾）

抑も松の位の女は、幼なきより物語み手習ふに心寄せ、敷島の道も及ばずながら、古人の読み捨も味はへ、茶の教奇、花の弄びも仕覧へ、十炷香、見合せなどは常の慰み、朝夕食の躰けに気をつけ、仮にも行儀を乱さず、立振舞閑然なれば、中々十人並の分限者の息女とても是程に育て難し。買ふて遊ぶ人も十人並の分限外れねば釣合ひ難し（『艶道通鑑』⁽⁶⁾）

以上が資料に記されている太夫に要求された教養であるが、客の前では常に無表情で周りが笑っても顔色一つ変えず、暑い日は汗をかかず、寒い夜でも火鉢で暖まる仕草もしない、人間的な美しさや気品さは全く感じられず仏のような神秘さがあった。ちなみに、遊女の最高位に太夫名を称した由来は、中古官制による職の長官「大夫」から転じて、能や舞などの最高演技者の称となり、四条河原で歌舞伎を演じた遊女名人の名につけられ、やがて廓内の高級遊女につけられるようになったことからきている。江戸の吉原ではこれに加えてもう一つ「花魁」という名称がうまれるが、これは元禄年間（一六八八〜一七〇三）に禿という遊女に仕える召使いの少女が「おいらがのエねえさんが！」と関東弁で称したことから「おいらん」というのが太夫の代称となり後に花魁の字を当てたことが由来である。しかしこれは関東のみで使われるもので京都では絶対にいわれない。

太夫に次ぐ遊女位の天神は、一昼夜の値段が二十五匁であったことが、北野天満宮の縁日が毎月二十五日なことにちなんで「天神」と呼ばれたのがはじめである。さらに、北野天満宮のご祭神である菅原道真が愛し

た梅樹と結びつけて「梅の位」とも称されていた。待遇や服装、揚代（遊女や芸者を揚屋に呼んで遊ぶときの代金）、禿の数などすべて一級ずつ太夫よりも低く、太夫とは同席することはなかった。

天神の下の位、「囲」は「鹿恋」、「鹿子位」とも呼ばれ、上位の遊女に比べてはるかに低く扱われていた。この由来に関して諸説あり、『好色由来揃』によると

かこひを鹿位といふは、近代囲の字をあらため、鹿恋となすゆへに、鹿の位といへり。むかしはかこひといひしいはれは、太夫天神にくらへ見るに、万貧なる事のみ。わけて床入のあはれさ、夜の物（寝具）さへ不自由に、たばこの火なんども、みづからたつて入にゆくなど、きのつまる事がちに、万わびたるさまにて、お茶たてらるゝといふゑんによりて、かこひといふとかや。ある人かこいとは『葵』如此書といへり。此字何にあるか出所をしらず。ずいぶん工夫して見るに、かのもの文字をわけてよめといふ詞にしたがい、分て見れば諸埒もない事、十八文女と読めましたくと、万笑に腹をいたため

とあり、「日本遊里史」にある一説では「キング打」という賭けを伴う勝負事で、十四の数が出ると伏せておくことを「かこひ」といい、値段が十四匁の遊女と結びつけ、その後値段が十六匁にあがったときの「シン十六」から「鹿猪」に通わせた、ともいわれている。

「太夫」、「花魁」、「囲」以外のものは「端女郎」と呼ばれ、遊女において最下級の総称である。この女たちは、客が遊女を呼んで遊興する場所である揚屋などには行かず、自分たちの寝所である局にて営業していた。また、こうしたランク制の位はその後必ず安定しているものではなく、成績や人気によって上の位から下の位に下がることもあり、またその逆もあった。

芸者は、宝暦元年（1751年）に京都の遊所に初めて現れ、江戸ではそれから少し遅れて吉原に現れた。天正十七年（1589年）、原三郎左衛門が豊臣秀吉の許可を得て、西洞院にあった遊女町を柳ノ馬場に移して遊里を開いた頃の遊女に遅れて、百六十二年後に芸者が登場したことに

なる。芸者の登場では『近世風俗志・娼家』において

享保年中（一七一六一一七三五）より芸子と云者出来り云々。然らば大阪は享保、京は始る歟

とあり、京都と大阪、近くにありながらも芸者の発生にかなり時間差があった。『三養雑記』には

もと遊女よりいでて、躍子の一変せしものなり

とあり、遊女の一部が変化したものと推測される。また、『一目千軒』には

太夫、天神自三味線弾かざる故、三絃ひかさんとおもへば、此太鼓女郎をよぶ也。又芸子といふもの外にあり。むかしはなかりしに宝暦末年にはじまる

とあり、この文章では三味線を披露するものと芸妓を別に表記しているが、遊女の代わりに席を取り持つ女性のことを称している。

一九〇五年に京都島原角屋が発行した『波娜娜娘女』によると、

芸者と娼妓を比べて、自然芸妙を貴ぶというがなべて廓の慣わしなれど、此廓（島原）にては正反対なり。故に同じ花に憧るゝにも、雨にうたれ風にいたみて惆れがてなる花に楽しまんよりはと、遊女に興がり玉ふ方は自然とこの廓に運ばせ玉ふ

と記されており、京都島原では芸者と遊女の位を比べて、遊女のほうが格が上だったということが分かる。一方、『京都坊目誌』には

島原は娼妓本位なれば娼妓を上席とす。祇園は芸妓本位なれば芸妓を上席とす

とあり、祇園では芸者のほうが格は上だった。同じ京都の花街でも、鳥原は遊女が上位、祇園は芸者が上位であり、同じ花街に遊女と芸者の双方が存在していた。

先程、遊女と芸者の違いについて簡単に「遊女は身を売り芸者は身を売らない」と説明したが、江戸時代後期、京阪の芸者はこれに当てはまらない。喜田川守貞は『近世風俗志』¹³⁾において

京阪島原新町其他祇園島之内以下諸所の芸子、皆専ら色を売也。江戸戸原芸者は更に色を売らず。他所俗に云岡場所の芸者も其所の風により或は売^レ之、或は色を売らず。京阪芸子色をも売ると雖ども、赤女郎の如く仮初には双枕せず。其主人たる置屋に茶屋を以て談^レ之て金を与へて後に双枕するを本とす。其与ふ所の金を枕金と云。まくらがねと訓ず。

とあり、「京阪の芸者は色を売る」としている。また前掲した『近世風俗志・娼家』¹⁴⁾には

又芸子にも奉公人と云は置屋を主人として大略二十五歳を満期として身をうりたる者を云。又自前と云は、身を売らず（年季奉公でなく）自宅ありて置屋に口銭を与へて芸子をするを云也。意を女郎の自前に同じ。又娘芸子と云も、自前に同じと雖ども、赤専ら置屋茶屋等の娘或は養女の芸子するを云也。又奉公人にも年長じたるはあれ共、自前は多く年長じ、四十以上の者も稀に有^レ之

蓋京阪女郎年長たるは本語一名前帯と云て、眉を剃て人の婦妻の扮にす。芸子は年長の者も多くは眉を剃らず、四十以上も処女の扮に近く、婦の扮は稀とす。江戸は女郎に婦扮なく、芸者には眉剃たるもあり。京阪に反す也。又京阪には遊里の外に芸子無^レ之、江戸には遊里に非る所にも芸子有^レ之、町芸者と云

とある。江戸時代、女性は結婚すると眉を剃りお歯黒をしていたが、京

都の芸者は年老いても眉は剃らずにいた。それとは反対に江戸の芸者は眉を剃り、既婚者であるとしていた。その理由に関しては次章で述べるが、同じ芸者でも地域により全く反対であった。

2-3 名を遺した遊女たち

ここまでざっくりと遊女について述べてきたわけだが、ここでは名を遺した有名な遊女たちの名をいくつか出し、どのように花街を生きてきたのかを具体的に探りたい。

まずは、『日本花街史』¹⁵⁾において明田鉄男が著名な遊女たちの中で別格としている吉野太夫についてだが、その理由は同書にて

①前節『名妓の条件』¹⁶⁾をすべて一身に具備した稀有の女性であった。
②美貌、教養など、その条件の一つ一つがすべて群を抜いていた。③すぐれた文化遺産を後世に残した。④海外にまで名を知られた唯一の遊女だった。⑤灰屋紹益との短い幸福な夫婦生活が、さわやかな感動を人々に与えた。

としている。吉野太夫は、本名を徳子といい慶長十七年（一六一二）七歳の時に京都六条三筋町廓の置屋林与次兵衛家に預けられる。そこで益子肥前太夫の禿として「林弥」と名付けられ仕えていたが、お忍びで来ていた出雲松江城主堀尾忠晴がその美貌に感心し、楼主であった林与次郎にこの子は大物になるからすぐに太夫職につけるべきだと忠告した。これにより、林弥は松の位の太夫職につけられ「吉野」と名乗ることになる。この時吉野は十四歳であったが、『吉野伝』¹⁷⁾において、

才智深く心情篤く、容顔艶麗にして花を欺き、一度口を開けば心融けざる者なく、一度見えて迷はざるなし

と言われるほどで、一気に人気を博していった。またその人気さは中国まで渡り、多くの者が吉野太夫の肖像画を求め、大明国の李湘山という者は詩を作って献呈したほどである。その他にも吉野太夫の優れた容姿

花街を生きた女性

についてはいくつかの逸話がある。六条に遊郭があったときに太夫十八人の集まりがあり、太夫たちは豪華な衣装で着飾って参列した。しかし吉野太夫は中々姿を見せないのと呼びにいくと、寝所から寝乱れ髪に白綾の肌着、黒の上衣に紫の帯という姿で、並みいる着飾った女郎の間を通り抜けて上席についた。その寝ぼけ顔の美しさに太夫たちも言葉を忘れて見とれていたというエピソードが『色道大鏡』に載っている。当時、化粧をしないありのままの姿が最も美しいとされていたので、吉野太夫はこれを利用したに過ぎないであろうし、美しく豪華な衣装に着飾った他の太夫たちよりも素顔に普段着の吉野太夫の容色のほうが数段まさっていたということである。また、吉野太夫は井原西鶴が絶賛した太夫でもあり、彼の代表作でもある『好色一代男』では前代未聞の遊女と書かれている。そして優れていたのは容姿だけでなく、教養も高く、歌道、連歌道、琴、琵琶、茶道、香道、插花、その他甚にまで至り、酒は殊に嗜んでいた。そんな彼女は多くの文化財も好んでおり、特に愛用されていた珍品に「蟹の盃」というものがある。これは室町時代に中国から渡来したゼンマイ仕掛けで動く蟹の形をした盃台で、横三寸、縦二寸五分、高さ二寸のものであった。京都東山にある高台寺の仏殿北庭にある「鬼瓦の茶室」「遺芳庵茶室」は吉野ゆかりの部屋といわれ、現在では大幅に修復されているが「鬼瓦の茶室」の棟の鬼瓦、「遺芳庵茶室」の大丸窓「吉野窓」は吉野太夫の好みをそのまま残している。そんな吉野は寛永七年、京の富豪灰屋紹由の子紹益に身請けされ、寛永二十年三十八歳で没する。

次に吉原で最も著名な遊女であった高尾太夫についてだが、この名は代々襲名されており何代続いたのかは曖昧である。『洞房語園』では七代、『近世奇跡考』と『京山高尾考』は十一代、『はちす代』は九代とされている。多くの人に名が知られているが、歴代の高尾については詳細も不明なものが多い。しかし、吉原においてトップスターであったことからどの歴代高尾も才色兼備で芸に練達していたと考えられる。また、詳細不明な点が多いが、何人かの高尾太夫に関する話はいくつか残っている。

続いて勝山という吉原で人気があった遊女についてである。本名を張子といい、元湯女で承応二年（一六五三）山本芳潤にもとめられて太夫

職につくことになった。勝山に関する逸話には面白いものがあり、松浦静山の『甲子夜話統篇』には次のようなものがある。

勝山は仲之町を道中する時、厳然とした態度で左右をみることはない、という評判を聞いた唐大権兵衛という客が、仲間の者に自分が勝山を振り向かせて見せようと約束し、その夕方一同で吉原へ行き、勝山の道中するうしろへ廻った権兵衛は鋏で彼女の髪の毛の元結を切ったので、髪ははらはらと落ちてしまった。ところが勝山は少しも驚かず、顔色も変えなかった。しかし髪が乱れたままでは歩くわけにはいかず、懇意にしている茶屋に寄って供の女に髪を丸く巻かせ簪で留めると、すぐにまた元の通りに道中を続けた。その姿はゆつたりとしていて美しく、ことに髪を巻き上げたところはかえっていつも倍もあでやかに見えた。このことは江戸中で評判となり、他の女性たちはこれを真似るようになった。その髪型は「勝山」と呼ばれ、今でも残っている髪型である。

第3章 服飾や文化からみる花街

3-1 遊女の服飾

現代では、舞妓や芸妓のメディアの露出が高く、京都の観光地では変身舞妓といった芸舞妓の格好に扮する体験ができる場も有名で、一般人の目に付くことも多い。また、白粉や紅をさした姿は一般の女性から見ても華やかな美しさがあり、最近ではそんな芸舞妓の綺麗さを参考にしたコスメブランドなどもあり、憧れを持ち自ら舞妓になりたいと志願する少女もいる。では、昔の花街は一般の女性から見てどのようなものだったのか。化粧や結髪、装飾等から、花街の女性について探っていく。遊女は階級ごとに、髪型・着衣・下着・帯・打掛・足元・化粧法に至るすべてに違いがある。さらにそれらは時代とともに変化していくので、すべてを把握するのは困難である。そのため、まずは基本的な原型を明らかにしていく。

南北朝時代における遊女は、官廷女房風の格式高い服装であった。髪は結い上げておらず、初めて結髪姿の遊女がみられるようになるの

は、天文時代（一五三二～一五四四）になってからである。承応・万治（一五六二～一六六〇）は、衣装は鹿の子模様で、亀甲、波頭、三ツ巴などがまじりあい、全体的に豪華であった。また、袖は丸く帯は腰のあたりでしめ、足元ははだし、髪型は立兵庫髷であった。享保頃になると、芸者は長袖後帯に足元は白足袋をはいた。藤本箕山の『色道大鏡』には太夫、天神、囲（鹿恋）の三階層の服装規制について詳しく説明されており、太夫の服制は豪華絢爛なものだったとしている。

遊女の服飾は時代により、しばしば取り締まりが出ていた。しかし、これは守られることはなく、花魁道中においての衣装は豪華なものが使用されており、江戸時代に甲州街道に存在した宿場の一つである内藤新宿でも美服を着ていた。また、岡場所での踊子は振袖姿の娘風を装い、先方の座敷に着くと留袖の着物に着替えたといい、これを真似して、町芸者は四十歳に近い大年増芸者でも、若造りをして座敷勤めを行っていた。ところがこれは、売色芸者の取り締まりが行われるようになって、落ち肩にして歯を染める者が出現するようになる。眉を剃りお歯黒をすることは、既婚者であることという意味があるので、芸者が独身ではなく売色はしないとすることを暗示するためであった。『守貞漫稿』によると、天保改革で岡場所はほとんど掃蕩され大弾圧を受けたため、そのころには水茶屋女の間にも眉を剃り歯を染める流行が起ったとされている。吉原の遊女風俗にも、歯を染めることは行われたが、眉を剃ることはなかった。前述したが、眉を剃ることはいったん身請けなどをしてその後また二度の勤めをさせることであった。つまり人妻となつて落とし肩にしたものに再び眉を生えさせて遊女勤めに出すわけである。

『北里見聞録』には、明暦・元和・貞享頃の遊女の服装は一般の女性の衣服と変わらなかったが、それ以降になると裾に綿を入れた少し変わったものになったと記されている。これは、京町一丁目の若松屋藤左衛門抱えの粧ひという遊女が着初め、他の者たちも真似をするようになったものである。衣装の豪華さについては、『錦之裏』によると、上着は白地の魚子織に紫の吹絵落としの源氏雲の中に四季の草花を極彩色で描き、紋所は紫のより糸で縫い、下着の無垢は緋緞子の銅に鶯色の無地の八丈絹で縁取りし下着と同じ模様を刺繍しているとされている。

化粧に関しては、江戸期、遊客の間では遊女は化粧なしの素顔が一番綺麗だとされ、それが客の思い描く理想像だった。化粧が許されていたのは、禿から一本立ちしたばかりの「新艘」と位が一番低い「端女郎」のみで、真の遊女は、禿の時から磨きあげられた非難される所のない美女であるべきなので、たとえ肌の色が黒くてもそれも美の要素であるという理屈があった。しかし、それが時代とともに遊女の質が低下、もしくは遊客の目が落ちたのか、次第に遊女は濃化粧をするようになっていった。京阪では、白塗りの技法も発達していき、口紅も濃くさすような、現代の芸舞妓の姿に近い形となっていく。

3-1-2 流行や文化の発信地

『江戸時代の流行と美意識 装いの文化史』¹⁸⁾によると

元和三年（一六一七）、吉原遊廓が日本橋の地に起立してから幕末まで二百五十年、この間吉原は単なる売笑の巷というだけでなく、そこは江戸市民の一大社交場でもあり、文化サロンでもあった。特に明暦三年（一六五七）の江戸大火後、吉原が日本橋から山谷の地へ移転して以後の新吉原時代は、江戸市民との交流は一層の進展を見せ、言語・風俗・文芸・歌謡・浮世絵等々の強力な発信地としての独自の地歩を占めることとなった。

とあり、色を売る街とはまた違った文化人たちの社交場であった一面がある。位の高い遊女たちは高い教養を身につけており、将棋・和歌・三味線なども学んでいたから、公家・武家・町人などの有力な男性たちも集まり、このように文化発祥の地とされていたのだろう。前章で述べた著名な遊女たちも、世界でも稀な文化人女性であり、花街がこうした優れた女性文化人を創り出したということは、注目すべき点である。また、こうした女性たちは衣装、化粧、頭髪の結い方、櫛笄などの女性風俗文化に及ぼした影響も大きかった。前掲した『江戸時代の流行と美意識 装いの文化史』¹⁹⁾において近世文学研究家の佐藤要人は、遊里は文化の発信地であり遊郭の女性たちは一般の女性たちから見ても、今でいう

花街を生きた女性

ファッションリーダーのような役割であったと述べている。江戸時代、女性の髪型は最も華やかで髪結の種類も豊富にあり、年齢や職業、身分、既婚者未婚者であるかによって髪型も違っており、一目みればどのような職の女性であるかがわかった。江戸初期には、公家や武家階級の女性たちは垂髪という髪を後ろに垂らした髪型であったが、女歌舞伎や遊女などが兵庫鬘や島田鬘、勝山鬘を結い始めるようになり、いずれの髪型も後に一般の庶民の女性たちも結うようになっていった。兵庫鬘と島田鬘と勝山鬘は諸説あるが、遊女が結い始めたことが流行りのきっかけともされている。

髪型から江戸吉原の変遷をみていくと、元吉原時代では戦国の余韻が残り諸大名たちは金紋先箱の行列を従えて、豪放な遊興を展開していた。この時の太夫と太夫の次の位である格子の髪型は立兵庫という髪型で、これは吉原の権威の象徴として宝暦までつづいた。新吉原が極端な不況に見舞われ、多くの店が廃業すると太夫と格子は吉原から消え去り、立兵庫を結う者はいなくなつてしまった。それと共に太夫・格子といった遊女の階級制は吉原から姿を消す。明和七年（一七七〇）に刊行された吉原の遊女たちを描いた美人画『青楼美人合』には、立兵庫の遊女は一人も描かれておらず、立兵庫のかわりに兵庫鬘のバリエーションがいくつも見られるようになる。兵庫鬘は元は立兵庫であり、それが多くの派生型を生んでいく。また、『青楼美人合』には島田鬘が圧倒的に多く描かれており、その次に勝山鬘が多く見られる。そして江戸中期には燈籠鬘という髪型が大流行する。これは京都から発生したもので、『享保・延享・江府風俗志』²⁰には

夫より京祇園の女子供、とうろうびんとて、つとを少く、びんを出して、内の透やうに結し也。赤すきびんとも云。此姿のはやり下りて、江戸にてもそろ／＼たほをつめ鬘を出して、左右より鯨の平棒を両方よりさして持せるなり。

とあり、これはやがて江戸にもわたり、まずは水商売の女たちが真似をするようになる。特に、京都の女性を積極的に受け入れる組織があり風

俗に敏感な深川という地で流行り、その後新吉原へと移り、一般女性の間にも普及していった。また、立兵庫も吉原独特の髪型であるが、兵庫鬘は多くの派生型を生み、一般女性の髪型として普及した。勝山鬘も同様であり、この鬘は屋敷敷を工夫したものとされる。承応・明暦（一六五二～一六五七）の頃、丹前風呂の湯女であった勝山が、吉原に移って遊女となり、生来の美貌と利発的な性格からこの髪型を創始し、これを真似るものが多く出てきた。これが民間にも伝えられ、勝山鬘が普及することとなる。吉原は、結髪文化の発祥の地であり、一般女性たちの結髪にも影響していた。結髪など髪型について述べるにあたり欠かせないのが、櫛や簪、笄である。「櫛」は毛髪を梳くもの、「簪」は昔、冠が落ちてこないように髻に突き刺した串「かみさし」であり、「笄」は髪をかき上げるための「かみかき」のことである。しかしいずれも、本来の機能を忘れて純粹な装飾品となり、特に花街においては重要な小道具となつていった。

その他、江戸文化の代表ともいえる浮世絵も、好色的で享乐的な絵であることから多くの市民に愛好されたため、吉原の名妓やそれ以外の岡場所の美女たちが盛んに描かれ、艶のある遊女たちの姿が巧みに表現されていた。その他の江戸文化でも文学分野において、黄表紙や洒落本の占める位置は大きい。その題材は吉原に関するものが多い。また、廓の中で起きる遊びは様々な悲喜劇を引き起こし、それは井原西鶴の『好色一代男』や『浮世草子』、近松門左衛門の傑作世話浄瑠璃『曾根崎心中』を生み出した。また、『日本史小百科 遊女』²¹では

文政九年（一八二六）に玉菊という遊女の書の掛物が出来たので、八月十三日山谷の八百善で玉菊忌が催され、その時の一座の集いを渡辺華山がスケッチしたものである。それには、八百善の主人、玉菊のいた吉原中文字屋の主人、酒井抱一、日本橋の富豪池田狐村、有名な花扇のいた五明楼の主人らが描かれ、一々その名が記されている。この玉菊忌では十寸見蘭州が二代目河東に作らせた。傾城水調子を一同で語り迫害とした。この二代目河東は、吉原大門外の商人であった。この水調子を語り、玉菊歿後の享保以来、毎年吉原

や山谷の八百善などでこの玉菊忌は催された。そうして右に見たような文化人たちが集まって河東節を語った。吉原は、こういう文化人サロンであり、そこで歌や詩や俳句や狂歌が創作された。

とある。吉原が文化人サロンであり、江戸時代の花街では教養ある遊女たちが多くいる中で彼女たちが媒介となり、様々な文化が創造されていくことが分かる。また、こうした文化が創造されていたのは吉原だけではなく、京都鳥原では俳壇が流行する。当時江戸俳壇で有名だった炭太祇が宝暦三年に鳥原置屋桔梗屋治介俳号呑獅の招きを受けて、廓内に「不夜庵」と呼ぶ場所を作りここで俳壇作りに没頭した。のちに鳥原俳壇として多くの俳人たちがこの鳥原に集い、幕末の頃に衰退していったが、こうした文化的な環境は遊女たちの教養に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

近世期における女性の喫煙風俗も遊里を母体として広まったものである。吉原では遊女と喫煙具は不即不離の関係であり、煙管は客をあやなす道具や一座の景気づけとして使われていた。これにはルールもあり、太夫は太鼓女郎の詰めてくれた煙管を受けとってのむのが普通で自分で詰めたりすることはなかった。また、一服だけ吸って煙管を返し灰になるまで吸うことはしない。飲み指しの煙草を火入れに落として次の煙草をその火で吸うことも絶対にしてはいけないとされた。

その他、一般女性たちが参考にしていそうな遊女の美学ともいえる心得は多くある。例えば、遊女がおかしいときに大口をあけて歯をむき出しにして笑うのは野蠻とされており、どうしても笑いたいときは口を袖で覆うか、横を向いてさしうつむきつつみ笑いするのが良いとされ、笑い方一つにも嗜みを持つことが必要とされた。その他にも食べ物の名前を口にする事も野蠻とされ、華奢のように思われるようにばたもちを萩の月、イワシをむらさきというように名前を変えて呼んでいた。

また、花街では独特の文化も発展しており、里言葉・廓言葉といわれる、映画や時代劇などできかれるような「さんす」「ありんす」といった言葉遣いが生まれる。これは廓の中だけで特別に話された言葉であり、どんな遠い国から来た女性であろうと、この言葉を使えば地方の訛りが

ぬけて古くから居た遊女と同じように聞こえるように出来たとされる。それは、遊女たちが源氏名を使う論理と同じであった。遊女は一人前になると別の名を称しており、これも廓言葉を使うのと同様にそれぞれの遊女が生まれた場所の過去を断ち切り、教養の高い美しい女性に仕立てるための手立ての一つだった。田舎から出てきた一人の女性に、源氏名をあたえ、その他にも豪華な衣装を着せ、髪を結って化粧に手をつくして、廓で生きる美しい女性にさせるように努めても、田舎言葉を美しい言葉にすることは不可能であった。そこで、短い期間で田舎言葉を捨てさせ完全に矯正することの出来る廓言葉が誕生したのである。身なりや言葉、そして名前を一新させ、新しく生まれ変わった形で遊客に接することにするのが、廓の楼主の商品としての遊女創出の原則だった。また、廓言葉が使われる廓内では、遊客が普段住んでいる日常生活とは別の世界、現実を遮断した場所であることが必要であった。そのため、単に言語の語彙が違うというだけでなく、話し方のイントネーションに違いがあり、大きな特色がある。

おわりに

「花街」とひとまとめに読んでみても、時代や地域によって様々であり、文献も多くのこつていることから非常に複雑であったが、時代ごとに細かく区分することにより明確に現代と昔の花街について知ることができた。現代における花街は芸を極めた者によるお座敷や料理、歴史ある建物が並ぶお茶屋などの風景が積極的に保持されており、売春行為を行っていたことは撲滅されるべき存在として扱われているように見えるが、昔は同じ場所に存在していたものであり、それが現在の花街のイメージとして対極ともいえる双方が連想されることは興味深かった。

花街の女性たちは浮世絵の資料から見ても、非常に豪華な髪型や独特のファッションをしており、当時の一般の女性から見たら真似をしたくなるようなものばかりでこの時代のファッションリーダーであったことは明確である。そんな遊女たちが集まる場所だからこそファッションだ

花街を生きた女性

けでなく、様々な文化が発展し花街で流行していったのであろう。
本稿では、「花街を生きた女性」とのことで花街の女性の風俗史について述べてきたが、その女性たちを取り巻く遊客に関しての文献もいくつか見られたので花街に関する男性についても今後の研究課題にしたい。

注

- (1) 明田鉄男 (1990) 『日本花街史』雄山閣
- (2) 折口信夫 (1966) 『折口信夫全集第4巻』中央公論社
- (3) 倉田保之 (1909) 『京都先斗町遊郭記録』(新撰京都叢書9)
- (4) 前掲 (1)
- (5) 元禄年間刊『風流敗毒散』
- (6) 増穂残口 (1891) 『艶道通鑑』金桜堂
- (7) 吉田半兵衛 (1692) 『好色由来揃』万屋彦三郎
- (8) 守貞謄稿 (1999) 『近世風俗志・娼家』岩波書店
- (9) 山崎美成 (1840) 『三養雜記』青雲堂英文
- (10) 斜天 (1757) 『一目千軒』八文字屋八左衛門
- (11) 中川徳右衛門 (1924) 『波娜婀娜女』
- (12) 碓井小三郎編 (1916) 『京都坊目誌』
- (13) 前掲 (8)
- (14) 前掲 (8)
- (15) 前掲 (1)
- (16) 名妓の条件「名妓とはなにか。当然考えられるのは、美貌と人柄と教養を兼ね備えた高級遊女、ということであろう。当今ではこれに『接客技術』が加えられるかも知れない。問題は、このうちの『人柄』である。ただ単にやさしさ、女らしさだけでは、名妓にはなれない。ピンと張った強靱な背骨が必要条件である。それは意地・意気・張りなどの近世用語が示す、今でいうカッコよさであり、その裏には現代では死語になりかけている俠気が充ちみちていなくてはならない。」

- (17) 湯浅経邦 (1912) 『吉野伝』
- (18) 谷田有史 村田孝子 (2015) 『江戸時代の流行と美意識 装いの文
化史』三樹書房
- (19) 前掲 (18)
- (20) 前掲 (8)
- (21) 西山松之助 (1979) 『日本史小百科 遊女』近藤出版社

参考文献

- 加藤政洋 (2005) 『花街 異空間の都市史』朝日新聞社
 岩下尚史 (2009) 『芸者論 花柳界の記憶』文藝春秋
 中野栄三 (2003) 『江戸時代選書5 遊女の知恵』雄山閣
 滝川政次郎 (1965) 『遊女の歴史』至文堂